

序 文

本書は、アジア経済研究所が1987年に開始した、ASEAN等経済開発政策現地研究事業の第18点目にあたり、マレーシアで出版されたものである。

クアラルンプールを拠点とする調査研究チームは、タイ、フィリピン、インドネシアに続いて1989年に本事業を開始し、1990年には香港のプロジェクトが加わった。以来、マレーシア・チームは1990年に、『マレーシア経済—政策と構造変化—』(ASEAN等現地研究シリーズNo.9)、1991年に『転換期のマレーシア経済』(同No.13)の2点を刊行し、ともに同年、日本語に翻訳され東京で出版された。

このプロジェクトを担当するため、1989年後半に当地に赴任した際、私は2年半以内に3点の出版を成し遂げる自信はなかった。いま、任務終了に際し、私は本書をはじめとする3点を手にしている。このことは、多くの人々の多大なる助力と協力なしには達成しえなかった。そのすべての人々へ心から感謝の意を表したい。

特に、このプロジェクトへのすべての共同研究参加者からは深い恩義を受けている。彼らの多くは、このプロジェクトに2度、3度と貢献している。モクタール・タミン教授、イスマイル・サリー博士、アブダル・アジズ・アブダル・ラーマン博士、モハマッド・アリフ教授、H・オスマン・ラニ教授、アヌワール・アリ教授。私はジャアファー・アーマド博士、タン・ユー・チャイ氏の第1冊目と、第2冊目への貢献に対しても感謝しなければならない。これら共同研究者は、それぞれの所属機関のなかで最も多忙な人物の1人である。それにもかかわらず、彼らは時間を割いてこのプロジェクトに参加し、各章を担当し貢献してくれた。

1989年以来、寛大なる助力と協力でこのプロジェクトの実施を可能にして

くれたモハマッド・アリ・ハシム教授率いるマラヤ大学高等研究所 (Institute of Advanced School) の研究・事務スタッフの方々に特に感謝する。研究所での生活は快適で有意義なものであったし、このプロジェクトを遂行するうえで大きな励ましを与えてくれた。本書および第2冊目の編集に貴重な助力を与えてくれたマラヤ大学経済行政学部卒業生であるゴイ・スー・チンさんにも感謝を表す。本書のすべてに目を通し、訂正を示唆してくれたパトリシア・ソルビーさんにも大変感謝している。彼らの献身的助力なしには本書は日の目を見ることはなかっただろう。最後に、東京でほとんどの事務処理を担当し、このプロジェクトの実施を助けてくれたアジア経済研究所の調査企画室、国際交流室の同僚にも謝意を表したい。

われわれが製作したこの3冊がマレーシア経済の一層の理解のため、世界の経済学者間相互の協力のきずなを強めることに役立つことが最大の願いである。

横山 久

1992年3月

クアラルンプールにて

日本語版への序文

本書は、1991年度にアジア経済研究所が実施した「ASEAN等経済開発政策現地研究」事業（マレーシア）の成果の英語版“*Foreign Direct Investment in Malaysia*” (ed. by Mohamed Ariff and Hisashi Yokoyama, ASED series No. 18, Institute of Developing Economies, Tokyo, 1992) を日本語訳したものである。

マレーシアは、本シリーズの第1作目にも記したように、日本国内では、他の東南アジア諸国に比してあまり知られていない。アジア経済研究所は、近年、堀井健三・萩原宜之（編）『現代マレーシアの社会・経済変容』（研究双書 No. 370, 1988年）、堀井健三（編）『マレーシアの社会再編と種族問題』（同双書 No. 386, 1989年）、堀井健三（編）『マレーシアの工業化』（工業化シリーズ No. 12, 1990年）等で日本国内での理解をはかるとともに研究成果を公表してきた。また、それぞれの東南アジア諸国において、現地の研究者とともに各国の経済開発政策に関する研究を行う本シリーズも1989年度にマレーシア・プロジェクトが発足し、横山久（編）『マレーシアの経済-政策と構造変化』（本シリーズ No. 9, 1990年）、横山久、モクタル・タミン（編）『転換期のマレーシア経済』（本シリーズ No. 13, 1992年）を刊行してきた。本書は、このマレーシア・プロジェクトの第3作目である。

第3作目までを担当してきた横山は、1992年3月に帰国し、東京での業務に携わっている。かわって、原不二夫海外調査員が同じくクアラルンプールにおいて、第4作目、5作目を担当している。

本書を刊行するにあたり、翻訳監修をして頂いた調査企画室佐藤幸人氏には、大変にお世話になった。特に、記して感謝したい。氏は、翻訳された原稿をていねいに監修してくれた。おかげで本書は読みやすくなった。もちろん

ん、ありうべき誤りについては、日本人編者の責任にあることは言うまでもない。

横山 久

1993年3月

東京にて